

大学経営政策研究

第14号 (2024年3月発行) : 109-125

# 大正末期から昭和初期における学生の紐帯形成に関する考察

## —慶應義塾予科会の成立と応援歌『若き血』の作成—

長谷坂 大 樹



# 大正末期から昭和初期における学生の紐帯形成に関する考察

## —慶應義塾予科会の成立と応援歌『若き血』の作成—

長谷坂 大 樹\*

### 1. はじめに

#### (1) 研究の背景と目的

本稿の目的は、慶應義塾予科の事例考察を通じて、学生がいかに関係を形成したかを明らかにすることである。大正末期から昭和初期にかけて、我が国の高等教育は未曾有の量的拡大を経験した。なかでも1920（大正9）年に大学昇格した慶應義塾は、1922（大正11）年までに学生数が約3倍に急増し、「塾風頹廃」<sup>1</sup>と呼ばれるアイデンティティ喪失と人間関係希薄化の危機に直面した。こうした切実な課題に対して学生はいかに解決の方途を見出したのだろうか。本稿では、慶應義塾予科の学生団体である慶應義塾予科会（以下、予科会）の成立過程と応援歌『若き血』の作成過程を分析し、学生の希求とその行動に接近する。

1918（大正7）年の大学令制定や高等学校の増設により、高等教育は大衆化の初期の段階を迎えた。また長引く不況とロシア革命を背景とするマルクス主義の台頭は、学生による思想運動を誘発した。学生思想運動の嚆矢は1918（大正7）年の東大新入会の成立である。新入会成立以降、各大学で社会主義団体が設立されるなど、学生思想運動は全国に広がっていった。唐澤（1955）は、急速な高等教育拡大が就職難と入学試験の過熱化を引き起こしたと述べ、竹内（1999）は、学校騒動や同盟休校が頻発し、大学に対する懐疑論も強まっていたと指摘する。こうした状況下で、伊藤（1999）によれば、大量生産的で知識注入的な教育の弊害、学生文化と学校の組織文化とのギャップ、学歴社会化の進行、就職難による将来への不安など、学生の閉塞感や不満が存在した。

対象の慶應義塾では、1920（大正9）年に2329名（内予科：1280名）であった学生数が、1921（大正10）年には4762名（内予科：2482名）、1922（大正11）年には6699名（内予科：3689名）と急増した<sup>2</sup>。天野（2013：212）は、旧制高校の特徴を「立地や小規模であることからする緊密な人間関係」と述べたが、同様に高等普通教育を目的とする慶應義塾予科では学生数の急増によって、まとまりのない気風が問題視された。この状況を刷新するため、学生は学内統一を目指して予科学生の自治団体である予科会を組織した。さらに彼らは結束を実現するため新塾歌を求め、応援歌『若き血』を作成するに至った。自治団体結成と学生歌作成は、一見共通の目的のもとに結びつかない。しかし、学生は「予科会は、塾内の統一欠除を嘆いて、統一それ自体を目的として作られ、之を目的として進み、塾歌運動は塾の最も力強い表象を求めて進んだが、この二つの運動は結局に於て師福澤諭吉の精神を二つの異った方面から求めたものに過ぎない。さればこそ、予科会は統一を求めて、その必然的コロラリーとして福澤精神に帰り、又塾歌運動は福澤精神の表徴を求めて、山上各

\* 東京大学大学院教育学研究科 博士課程

会の統一を結果したのである」と共通の目的であったと回想する（中村 1926：記録 3）。一つの目的のため多角的に展開された活動を分析することは、当時の閉塞感のなかで行われた思想運動によらない学生活動について、新たな視角を示すだろう。

## (2) 先行研究の状況

大正末期から昭和初期の学生について、竹内（2003）、筒井（2009）は、教養主義の観点から分析を行った。当時知的青年の規範文化は教養主義だったが、新人会成立以降マルクス主義へと変化したとする。永嶺（2007）は、新人会の学生はマルクス主義的読書を行っており、学生の思想動向を牽引したと述べる。唐澤（1955）によると、こうした左翼思想運動は1928（昭和3）年の三・一五事件を契機として衰勢に向かい、1932（昭和7）年を最高潮期として禁圧されたが、井上（2008）は、左翼学生運動全盛期であると同時に、昭和10年代の右傾化に先行する右翼学生運動の台頭期であったと捉えた。

また学生像について、唐澤（1955）は、特権階級者から知的労働者への変化が生じたと述べ、井上（2001）は、明治・大正の文学青年から大正・昭和の社会青年への転換が見られたとする。天野（2013）は、学生の大衆化により、エリートから「恐れられる」存在に変化したと述べた。

旧制高校と私大予科について、天野（2017）は、旧制高校では進学競争の激化により、自立的な人間形成の特色を失いはじめたとしたが、天野（2013）は、私立大学予科ではより開放的なキャンパスライフが存在したと述べる。また高等教育拡大のなかでも、特に私学は質的・量的な転換期を経験し、主要私立大学の予科は大衆化していたと指摘する。

以上の通り、当時の学生については、主に学校騒動、同盟休校、就職難、教養主義の観点から考察されてきた。これらで用いられた学生思想運動や読書傾向の分析は重要だが、高等教育拡大期において多層的に展開された学生活動を捉えるには十分ではない。

また慶應義塾予科について、江津（2003）は、慶應義塾予科と早稲田大学予科を事例として、予科設置の意義を考察した。予科は高等学校よりも教育機会を広く提供し、学科課程等において独自性を持ちうることを明らかにした。また山本（2018）は、大学昇格以降の慶應義塾予科における教育課程を分析した。慶應義塾予科は、高等普通教育を行う組織として旧制高校に準ずる教育を担保しつつも進学先学部に適したカリキュラムを準備したことを示した。上記の通り、慶應義塾予科を教育課程から分析した研究は存在するが、学生活動に関する研究はほとんど蓄積がない。

慶應義塾の学生歌は、慶應義塾福澤研究センターを中心に分析が進められた。特に『慶應義塾学生歌』は、坂部（2017）が制作過程、山内慶太が歌詞から分析を行った。『若き血』は、『慶應義塾百年史』、『慶應義塾大学応援指導部 創部75年記念部史』、『慶應義塾史事典』（都倉武之）で作成経緯が整理された。これらの研究により、『若き血』作成時の概況は整理されつつあるが、高等教育拡大の背景を踏まえ予科会の成立過程とともに学生の希求と行動を分析した研究は管見の限り見当たらない。

### (3) 課題設定と史資料

以上を踏まえ、紐帯形成の過程を解明するため、二つの課題を設定する。第一には、反対者を包摂する過程を検証する。学部学科を横断する組織は、個々が異なる課程や環境を持つため、合意形成に困難を抱えることが多い。予科会が反対者の出現を乗り越えた過程を整理することで、学生相互の対話と交渉の状況を確認することができる。また元来予科学生のみを参画対象とする予科会が、いかに全学規模での紐帯形成に寄与し得るのかにも着目する。

第二には、教員との関係構築を検討する。伊藤が学校騒動を「主として学校管理者・教職員と学生との間で生じた集団的かつ顕在的な対立・衝突」と定義したように（伊藤 1999：141）、学生生活の多くは教職員との対立構造を孕んでいた。井上（2019）は、エリート養成機関に対して指導理念を「上」から押し付けることは困難であり、教師と学生、学生同士の相互作用の中で規範文化が生成されたと述べる。学校騒動の多くは思想運動を背景としたものであり、同盟休校は学校側への要求の発露であるが、思想運動によらない自治活動は教員をいかに位置づけたのだろうか。

史料は主に慶應義塾の学生新聞である『三田新聞』、予科会の『予科会誌』を用いる。その他、回想録や雑誌記事等から予科会の形成と『若き血』作成の過程に関する記述を参照する。また『慶應義塾百年史』や『慶應義塾150年史資料集』など学校側の史料も用いるが、本研究では学生側の視点を重視して分析を進める。

以下では、まず予科会成立過程の分析を行い（第2節）、次に塾歌作成運動に連なる応援歌『若き血』の作成過程を検討する（第3節）。最後に慶應義塾予科で2つの活動が目指した紐帯形成について総括する（第4節）。

## 2. 慶應義塾予科会の成立

### (1) 大正末期から昭和初期の慶應義塾

慶應義塾予科の学生生活を考える前に、まずは当時の慶應義塾について整理したい。当時の慶應義塾大学には、文学部、経済学部、法学部、医学部の4学部が設置され、修業年限は大学昇格以降、予科3年、学部3年（医学部は4年）とされた。従来の大学部予科の修業年限は2年だったが、大学昇格で1年延長されたのである。そのため予科に所属する学生数は増加し、予科校舎増設など施設拡張が行われた。しかし、校舎増設後も校地の狭隘が課題とされ、1934（昭和9）年には予科の日吉移転が行われた（慶應義塾 1964）。予科は文科系学部進学的第一班と医学部進学第二班に分けられ、さらに第一班の学科課程は文学部と経済学部・法学部に分けられた。山本（2018）によると、高等学校規程に準拠しつつも進学予定学部を念頭においた編成であったという。また医学部は学科課程のみならず、地理的にも異なる環境であった。予科と文学部、経済学部、法学部は三田に設置されたが、医学部本科は四谷に設置された。医学部は修業年限でも地理的条件でも独自の環境にあったと言えるだろう。

また前述の通り、当時は学生思想運動が活発であった。伊藤（1999）によれば、学校騒動は全国的に1921（大正10）年頃から増加し、1926（昭和初）年をピークとして頻発した。慶應義塾でも、左右両面の思想運動が頻発していた。

表1：大正末期から昭和初期の慶應義塾での思想運動（慶応義塾 1964：216-219より作成。）

年	出来事
1918（大正7）年	東大内に左翼学生団体として新人会が結成。左翼団体が全国各地の大学で結成。
1919（大正8）年	東大内に右翼学生団体として興国同志会が結成。
1922（大正11）年	全国の大学にある左翼団体が「日本学生社会科学連合会」（学連）を結成。慶應義塾では左翼団体として三田社会問題研究会（社研）が結成。
1923（大正12）年	「過激社会運動取締法案」反対運動に社研が「三田反逆会」として参加。
1925（大正14）年	学連の集会にて慶應義塾の教室を無断で使用しようとする。学校は退去を命じたが、学生は学連の歌を高唱し、示威運動を行った。
1927（昭和2）年	右翼団体として精神科学研究会（予科教員の蓑田胸喜が中心）が結成。
1928（昭和3）年	文部省により社研が弾圧される。
1931（昭和6）年	学生思想問題調査委員会の設置など、政府は教学刷新で思想問題の解決を図った。

一方で思想運動以外にも、学生は課外活動を行っていた。主なものが東京六大学野球である。1903（明治36）年に早稲田大学との対抗野球試合（早慶戦）が開始した。その後、早慶戦は1906（明治39）年に応援の過熱で中止となったが、1925（大正14）年に再開され、東京六大学野球が成立した。野球試合は重要な関心事であり、他校との交流の糸口として機能した。慶應義塾の学生は、高等教育拡大のもとで積極的に活動を行い、大学昇格後の新たな学園を構築した。

## (2) 慶應義塾予科会の成立

こうした状況のなか、なぜ予科会の設立が構想されたのだろうか。前述の通り、1920（大正9）年に大学昇格した慶應義塾では、学生数が急増し、「塾風頹廃」というアイデンティティ喪失と人間関係希薄化が指摘された。『三田新聞』161号では嘱託の山名次郎が「慶應義塾生気の頹廃」との談話を発表し、『三田新聞』163号には「塾生気風の頹廃」について塾長や体育会会長の意見が掲載された。予科生の中村恵は「吾が塾も亦之と共に非常な発展をなし、遂に今日の壮大を來たす事となりました。…組織の膨大は不可避免的に経営の事務化を惹き、…学生の信念とか意気と云う様なものにも学校と云う形に嵌められる事によって、自然、萎縮するに到りました」と振り返る（中村 1926：記録 2）。

当時の慶應義塾では、学生思想運動の高まりとともに各種団体が組織され、自治権獲得運動が活発化していた。専門分化以前の予科では予科生間の自治的団結を求める機運が存在したが、1925（大正14）年の高等部会の成立と早慶戦敗北の後、予科生全員を会員とする自治団体の設立が構想された。予科生の大塚英雄は「予科四千と一口に申しますけれども、その三千五百乃至七八百の学生がおって、何だかパーッと纏りのない感じでありました。それで何とかしてこれを打って一丸としたいという気持が多分にあった」と回顧する（慶應義塾予科会 1936：5）。

具体的な設立運動の契機は、1925（大正14）年の川合貞一予科主任による訓話である。川合は

一学期と二学期に予科の各組委員<sup>3</sup>に対して「予科を一つの統一連絡ある全体とし学生の意見や要求も聞きたいから之に協力して貰いたい」と話した（大塚 1928：12）。これを受けて予科3年の間で予科会設立運動が起こり、川合は「予科学生諸君等の間に予科会を起そうというような議の起こりつつありと云う如き、最も歓迎すべき」と述べた。川合は当時を「どうも斯う云うように多数の学生諸君が散々ばらばらになって居てはいけぬ、何か或程度の統一をつける必要があるのではないか」と回想する（慶應義塾予科会 1936：14）。

設立の中心は、予科3年の橋本虎之助、近藤寅雄の2名であった。設立にあたり近藤は「塾を救うものは、全塾生の一致団結を措いて他にない」と述べ、団体的意識により意気を回復するという予科会設立の目的を示した（近藤寅雄「友よ-予科会設立について-」『三田新聞』163号、1925年12月4日）。2名は1925（大正14）年12月中の準備完了、1926（大正15）年初頭の発会式を計画したが、設立には予期せぬ困難があった。

最初の障壁は、設立趣旨の周知であった。12月5日に第一回予科全委員会が開かれたが、会合趣旨の不徹底を理由として設立運動を批判する委員が現れた。批判者は前日の『三田新聞』を確認しておらず、委員会で予科会設立構想を知ることとなったために唐突と難じたのである。議論の結果、予科会の事業を講演会・雑誌発行・運動の奨励、会費は一円五十銭、会長は川合、3年の委員を準備委員とすることのみが決定され、準備の具体的内容は翌年に持ち越された。全委員会は各組の委員が集合して議論を行うものであったが、設立準備に携わるのは3年委員のみであったために、特に1、2年委員から反感を買ったとされる。第二回委員会は、1926（大正15）年1月12日に実施された。この時予科会設立の概要が掲示板と『三田新聞』164号にて周知されたが、内容は第一回委員会と同様の漠然とした内容であったため、正式な会則を起草することとなった。会則は、委員会終了後に橋本、近藤が作成した案をもとにして、予科2年の大塚、永田多一を含めた4名で検討を行い、2月15日から20日で起草を完了した。会則草案は2月末実施の第三回委員会にて、字句修正と条文整理の末に通過し、川合による校閲、占部百太郎理事の許可、理事会の承認を得た。ここに予科会は趣旨徹底の課題を乗り越え、設立の基盤を完成させたと言える。4月には、進級の代替わりがあり、予科3年に進級した大塚、永田が予科会設立の中心を担うこととなった。大塚、永田は、新年度の全委員会実施にあたり、「本会の主旨は要するに福澤先生建塾の精神の実現に外ならない。吾等塾と云う大きな一家に集って…部分的団体のみでなく三色旗の下に吾等の大きな団結を堅くしたいと思う。我等は茲に予科会なる名の下に結束して塾の真精神を中外に明らかにせねばならぬ」（『三田新聞』172号、1926年4月27日）と予科会設立の意図を示した。

誕生を待つばかりと思われた予科会であったが、更なる障壁に直面した。第二回、第三回委員会欠席の委員に、予科会設立の反対者が存在したのだ。反対者は自らが予科会設立に賛成したとは認識しておらず、賛否の確認を取らずに議論を進める大塚らの態度を独断専行と考えた。予科3年の中村は、5月3日に「予科会ハソノ成立手續ノ過程不備ナルヲ以テ我々有志ハソノ成立ヲ認メズ、少クトモコノ予科会ハ認メズ、有志」とのピラを掲示し、反対の立場を表明した（慶應義塾予科会 1936：6）。そのため5月7日には、座長を大塚とする新年度最初の全委員会が実施され、中村を含む3名の反対派との議論を行った。反対派は第一回委員会で賛否の決をとり記録を残さなかった

手続きの不備を主張したため、3年委員全員を準備委員として再び設立の決議からやり直すこととした。散会後には3年有志での意見交換を経て、5月11日に3年委員による総会を実施し予科会を設立すること、3年委員全員を準備委員とすることを満場一致で決定した。

しかし、反対者との交渉はまだ解決していなかった。5月22日までには大部分の組の賛成を確認したが、医学部はすべての組が反対であることが判明したのだ。大塚は「ここに始めて最大の暗礁に乗上げたことを知った」と回顧した（大塚 1928：19）。予科を三田、本科を四谷に設置する医学部は、地理的に離れた予科と本科を連絡する目的で1920（大正9）年に三四会を成立させており、予科会設立に「予科の僅か三年間を一緒に過すために予科全体を打って丸とした会というものは我々はその必要を認めない」と反対した（慶應義塾予科会 1936：8）。また「元来医学部はクラス関係が頗る密接でよく統制が取れており、三年生のいうことは一、二年は異議なくこれに従う」状態で（慶應義塾予科会 1936：8）、「予科という横の連絡を考え」る予科会と「学部という縦の連絡に重きを置く」医学部の意見が対立したと言える（慶應義塾予科会 1936：9）。5月29日に医学部予科委員十数名が提出した『反対意見七ヶ條』には「我々ハ予科生ナリトノ自覚強キカ或ハ学部生ナリトノ自覚強キカ」と述べられた（慶應義塾予科会 1928b：19）。これに対して大塚は「医学部予科はその学科の性質上科目等も他学部と非共通点多く、教室も半ば独立し、加うるに人数も少く、集約的であるからして医科だけとしてよく団結しておると同時に又他に対して孤立し勝ちであった」と医学部の特殊事情を認めながらも、医学部も含めた予科会設立への決意を新たにしている（大塚 1928：19）。医学部予科2年であった深田益男は、「特殊の物理だとか、化学とか、動物とか、云う実習が多くて、予科会と一緒に喜びを領つことが出来ない」と振り返る（慶應義塾予科会 1936：23）。また同じく医学部予科学生の木村將義は、「一つの或る学生の縦の団体の会と横の団体の連絡の会とがあった時に、兎に角縦の団体の方が其学生自身にピンと来るのではないか」と回顧した（慶應義塾予科会 1936：33）。もっとも予科会の役割については予科会委員の中にも意見の相違があった。中村は予科会を全塾校友会建設の一步と捉えたが、大塚は全塾の校友会建設ではなく、予科会が学内統一の実行的原動力となることが必要と考えた。

「横の団結に最も便利な条件を具えておるのは予科生だけである。各組は可なり集約的で授業時間も細分されておるから相互に連絡をとり易いし学問的研究も準備時代であってその分化もそれほどでないから相互に協力し提携し易い立場にあるが、本科生には此等の要素が欠けておる。それ故にこうした運動に最も適する我々予科生の団結が、ややもすれば事務的機械的に流れ易い塾風を絶えず引き締め、塾本来の自治的精神に目覚めしむるような機運を助長し得べく、かくて予科会自ら中心となる、実行的原動力となるというのがその真意であると思う。必ずしもここ膨大な塾全体を（形式的に）まとめた校友会を作るには及ばぬ、否むしろそれは却てあまりに膨大なる為に形式的となつて、塾監局とその実際の効果に於てえらぶ所がなくなる様な懼れがないでもない」（大塚 1928：20）

医学部との対立を解消すべく、6月1日には再び委員会が開催された。委員会では、医学部との交渉顛末を記録し予科会設立を一旦諦める意見、文経法三学部のみで設立して医学部の参加を待つ

意見、文経法三学部のみでの設立とした場合、医学部以外で不参加を希望する組を認めざるを得なくなるとの意見が交錯したが、6月5日まで医学部の最終回答を待つこととなった。6月8日には以前設立に反対した中村と予科3年（法学部）の高尾一郎が、医学部の説得にあたった。中村と高尾は、自身の法学部にも法学会、政治学会という縦の結束を目指す自治団体が存在するが最終的に予科会設立に賛同した経験を語り、医学部の再考を促した。その後2時間の検討の後、医学部は予科会に参加すると回答し、6月13日の全委員会では会則が承認された。

医学部の不参加という最大の困難を克服した予科会は、6月18日の委員会にて正式に成立した。6月23日には準備大会を開き、全会員の協力を要請した。9月22日の発会式で配布された『慶應義塾予科会設立趣意書』には、「義塾の義塾たる所以はその学校たると共に学生自身の独立自治の団体たりしにあり」と記載され、1928（昭和3）年4月18日発行の冊子『塾』には『福澤先生建塾の精神を発揮して』全塾をひとつところに結びつけんが為に組織されたわが予科会」と書かれた（大塚 1928：21）。また慶應義塾予科会綱領では「本会は…全塾の総合的自治的統一を図るを以てその根本目的とす」と予科会の目的を示した（慶應義塾予科会 1926：巻頭）。

以上の通り、川合の訓話が動機となりつつも、学生は自主的に予科会を形成した。川合は「私は直接此予科会を監督する訳ではなくして、唯盲目判を押し、時々委員諸君が参られて相談を受ける」と述べた（慶應義塾予科会 1936：14）。設立時には塾長の林毅陸も祝福の文を寄せており、予科会の結成が教員との連帯のもとで行われたことがわかる。

「予科会成る、誠に喜ぶべき事である。其の成立までには多少の困難があった様であるが、四部に分れて約三千五百の学生を含む大学予科としては、其の統一的団体の組織に相当の手續を要するは、寧ろ当然の事である。」（林 1926：3-4）

### 3. 『若き血』の作成

#### (1) 塾歌作成運動から応援歌『若き血』作成へ

これまで予科会の成立過程を見てきたが、予科会の初期的活動を知るにはまず塾歌運動を追わねばならない。設立当初の予科会では、「創立早々一つの重大な問題は塾歌を拵えなければならぬ」と言われた（慶應義塾予科会 1936：11）。塾歌は学内統一に必須と考えられ、予科生も「行詰まれる塾歌問題を直ちに解決し塾生の精神を統一し以て帰一する所を明かにすべきである。実に此等の事柄は他の如何なることをおいても真先になすべき我等が予科会の義務ではあるまいか」と述べる（神谷 1926：220）など第一に解決すべき問題と認識していた。

慶應義塾には1904（明治37）年作成の旧塾歌が存在したが、大正末期には新たな塾歌が求められた。職員の小沢愛囀は「何となく古臭くなつてしまつて、若人の頭にはびんと来ない。曲譜もどうも時世向きでない」と振り返る（小沢 1958：23）。塾歌問題は「義塾精神の統一と振作」<sup>4</sup>を目指し、「多年の懸案」<sup>5</sup>とされてきたが、「大正十四年春に復活した早慶野球戦に塾軍は連敗の憂き目を見て」（矢部 1929：14）、具体的な作成運動が開始された。

しかし、新塾歌の作成は難航した。塾当局は1926（大正15）年11月9日から1927（昭和2）年

1月11日まで新塾歌を懸賞で募集した。結果、81名の応募があったものの採用に至らず、6作品の作者に賞金を渡した。『三田新聞』では入選者に予科生が多いと報じており、予科生の関心事であったことがわかる（「いよいよ発表された新塾歌歌詞の入選者 予科生が多い」『三田新聞』190号、1927年3月3日）。次に塾当局は与謝野寛に塾歌の作詞作成を依頼した<sup>6</sup>。6月末頃に作曲が完成、作詞もほぼ完成との情報があり、7月末に瀨藤忠行、矢部他2、3名の予科会委員が与謝野宅を訪問し、9月の新学期までの完成を依頼した。その後、8月には与謝野作詞、信時潔作曲の塾歌が完成したが、塾歌審査委員会の審査で不採用となった。小沢は「どうも調子が高すぎて、早稲田や明治の歌曲のような悠然たるものがなく、「流石に見事な歌詞だが、塾歌として学生に歌わせるにはどうかなあ」との議論があったと振り返る（小沢 1958：24）。

塾歌作成の難航を見た予科会委員の間では、秋の早慶戦を控え早急に慶應義塾全体の意気を上げる歌が必要なため、予科会で新応援歌を作成する案が出た。10月に矢部は、教員である横山重の自宅を訪問し、塾歌作成の進捗を確認した上で「いよいよ塾歌が間に合わないようだったら応援歌でもいい 若し応援歌が駄目なら予科会歌でもいい 出来る丈けのことはやって見てそれでも駄目なら当局で募集されたあの歌詞を戴いて作曲は事情をお話して信時氏にでもお願いしたら或は一時的のものでもいいから早慶戦に臨んで歌い得るものが出来はしないか」と相談した（矢部 1927：100-101）<sup>7</sup>。横山は「塾で募集したあの歌詞でも、或は君達で新たに作るなりして歌ったら」と矢部の申し出を許可し、横山が塾歌審査委員会の了解を得ることとなった。しかし、運営の中心的役割を果たした予科会委員5名は「学校でやって居られるのに予科会がそれを差し置いてやる、と云うことは怪しからぬ」と新応援歌作成に反対した（慶應義塾予科会 1936：19）。彼らに対し矢部は「どうしても此際歌を作らなければいけない、皆が要求して居る」と反論し（慶應義塾予科会 1936：19）、激論の末矢部に作成を一任した。予科会は塾歌が早慶戦に間に合わないことを知り、自主的に応援歌を準備することとしたのである。

## (2) 慶應義塾予科会による『若き血』の作成

以上の経緯で、塾歌作成運動は応援歌作成へと繋がった。作成主体が学生に移ったとも言えるだろう。1927（昭和2）年秋、矢部は林、占部から塾歌募集の歌詞を新応援歌に使用する許可を得て、10月6日に瀨藤とともに川合に相談に行った。川合は応援歌を「予科会として作るなら差支えない」と許可したため、矢部と瀨藤は「もう既に早慶戦は十五日位後に迫って居るのであります。どうしても此の十日間の中に作らなくてはならぬのであります。どうか、良い人がありませぬでしょうか」と尋ねた（慶應義塾予科会 1936：19）。川合は彼らに慶應義塾の卒業生であり音楽史を教える野村光一を紹介した。そこで10月7日に予科会委員が野村の自宅を訪れたところ、野村は東京中央放送局で洋楽主任を務める堀内敬三を紹介した。堀内は、慶應義塾の出身ではなく当時作曲の経験も少なかったが、野村は堀内に「立てつづけに早慶戦に負けていて氣勢が上がらないから、氣勢の上がるようなものを作れ。『三田台上』も『独立自尊』も要らないよ」と話したため、堀内は作成を引き受ける気になった（堀内 1957：12）。瀨藤の回想によれば、予科会委員が堀内の元を訪れ、塾歌懸賞募集の際に寄せられた二、三作品を手渡し、「大体斯う云う歌が出来て居ります。之に譜をつ

けて頂いても宜しゅうございます。何分良いように、此の一週間ばかりの間に作って戴きたい」と依頼したという（纈纈 1936：19）。作成にあたり予科会委員は、『早稲田大学校歌』に勝てる応援歌を切望した。『三田新聞』は12日に以下の通り報じている。

「生まれいづる悩みを悩み抜いて来た塾歌は最近漸く生れんとして又ター頓坐を来して発表を見るに至らなかったが…取り敢えず予科会応援歌をつくって慶早戦に歌うこととなった、これは塾歌とは全然別のもので単に予科会だけのものであるから塾長も賛意を表している…予科会は一切野村君を信用して全然注文なしに堀内君に作成を依頼して居る」（「取り敢えず予科会の応援歌」『三田新聞』201号、1927年10月12日）

非常に短期間の作成依頼だが、13日には野村を通じて引き受ける旨の返事があったという。米国の大学で学んだ堀内は後に「そういうの（筆者注：米国の大学の応援歌）にくらべるとそれまでの日本の応援歌はちっとも元気が無い。私はアメリカの応援歌のような活動的なものも作ろうと思った」と回想している（堀内 1957：12）。

それでは実際に作成された応援歌はどのようなものだったのか。堀内は米国の応援歌に倣って斬新な発想<sup>8</sup>を取り入れ、五・五の字割とするなど工夫を行った。そのため、『若き血』は従来の七五調とは異なる新機軸の応援歌となった。北原白秋も後に堀内を褒めたとされる。堀内自身は「これまでの七五調と字割りが違うものだから漸新な感じがしたのだろう」と述べる（堀内 1957：12-13）。当時の学生歌は旧制高校の寮歌などドイツの影響を受けており、新たな作風の『若き血』には戸惑いもあった。当時の評判について、作詞家の藤浦洸は以下のように述べた。

「新作の応援歌に就いては、実に各方面に反響があった。早慶戦当時の諸新聞、雑誌、運動雑誌、等々…賛七、否三であつた。然し、芸術的仕事にたづさわっている人々の間では丁度その反対位の賛否である。…歌詞がまづいという説は私にも解る。…我々の仕事は、氏がああ云う風なアメリカのカレッヂ・エールのような上品な面白い曲を与えられた以上、それを効果的に歌わねばならないのである。」（藤浦洸「応援歌に就いて」『三田新聞』205号、1927年12月29日）

20日に堀内は野村へ完成を報告し、22日に野村は予科会委員の学生を再び自宅に招いた。完成した『若き血』をピアノで聴かせたところ、学生たちは喜んで帰ったという。『三田新聞』は実際よりも早い16日に完成を報じており、学生の新応援歌への関心の高さが窺える。

「慶早戦は目睫の間に迫ってきたのだ。そして残念ながら永久的完成を期している塾歌の我々の口にせられる時が未だ我々の得る所となっていないのだ、若者の血は燃ゆる！ 茲に予科会は新たに新応援歌を生んだ」（「慶早戦にそなえて予科会応援歌生る」『三田新聞』202号、1927年10月16日）

『若き血』は、26日に発表された。約20日での完成であり、約15年の時間を要した新塾歌<sup>9</sup>とは対照的である。大講堂での初演奏は、「講堂が一杯で入りきれない程、外にまで溢れて居」た。纈

續は当時を「如何に塾全体の方が歌を望んで居られたかと云うことが、はっきり判ったのであります」と回顧する（慶應義塾予科会 1936：20）。予科生も「応援歌発表当日の大ホールに於けるあの盛況、彼の感激。…『全塾の総合的自治的統一』に一步一步近づきつつあるのではないかと思うと嬉しくてたまらない」と振り返り、自治的統一を感じたと述べた（慶應義塾予科会 1927：123-124）。学内周知にも予科生が尽力し、24日には予科生の藤井素介が慶應義塾内の諸学校で配布する歌譜を作成し、学生団体（ワグネル・ソサエティ）が歌唱指導を行った。また普通部3年の増永丈夫（後の藤山一郎）による歌唱指導も行われた（慶應義塾史事典編集委員会 2008：421）。藤山（1957：26）は「この歌を早く覚えようと皆夢中になったものです」と振り返った。

早慶戦の敗北を端緒として作成された『若き血』だが、慶應義塾は作成直後の早慶戦で再開以来初めて2連勝した。『若き血』はまだ十分に浸透していなかったが、縁起の良い応援歌と認識された。『時事新報』には、『若き血』を通して学生が一体となる様子が報じられている。

「早軍壊滅の日―神宮球場のスタンドは血に燃える学生で埋められた…『都の西北早稲田の森に』の校歌一壘早軍の陣容を揺がせば『陸の王者慶應！慶應！』の応援歌、潮の如く空に渦巻刻々に熱し行く若人等の意気は『個人的野次を厳禁す』の立札が場を一巡するほどの物凄いものであった」（『陸の王者、慶應』に）『時事新報』、1927年11月8日夕刊。）

以降、慶應義塾は1931（昭和6）年春の早慶戦までに11勝3敗の成績を残し、『若き血』は全国的な知名度を獲得した。「其当時の女学生の見るような小説の中の詩と云うものに『若き血に燃ゆるもの』と云うのが出て来た」とも言われる（慶應義塾予科会 1936：20）。また『若き血』は他校の学生歌作成の契機となった。早稲田大学は、『若き血』を端緒として1928（昭和3）年秋から1930（昭和5）年春までに、5曲の応援歌を作成した。矢部（1929：14）は「これに依って応援歌に一新機軸を与えた…早稲田に明治に新応援歌を促し遂に帝大にまで校歌云々の問題を起さした」と振り返り、瀨瀨（1936：21）は「此早慶戦の時に応援歌が動機となりまして、新しい応援歌と云うものを学校がどんどん作るようになった訳でありまして、此応援歌の及ぼす所が非常に偉大であったと思います。此方も新しい応援歌を作る、と云う様にどんどん次から次へと作って行く」と云うような状態になった」と回顧する。

また『若き血』は、海外大学との交流の際にも用いられた。慶應義塾の塾生がカリフォルニア大学を訪れた際には、交歓会で『若き血』を合唱している（「異国で高唱された懐しの応援歌」『三田新聞』214号、1928年5月16日）。またイリノイ大学の学生を迎え入れた際には、『若き血』を合唱し、イリノイカレッジソングを練習した記録が残っている（「イリノイを三田に迎え全塾生との盛な交歓会」『三田新聞』219号、1928年9月3日）。『若き血』は慶應義塾の学生を示す表象ともなり、当時の『大学評判記』には「彼等には…逞しき実行力がひそんでいるのだ。見よ、精鋭の集うところ…これは、ひとり野球の応援歌だけにとどまるであろうか」（榛名 1933：71）と記載された。アイデンティティ形成は他者との関係に立脚するが、『若き血』は学外の他者を自己に投影する視点からも紐帯形成の一側面を担ったと言えるだろう。

#### 4. おわりに

本稿では、慶應義塾予科の学生がいかに紐帯を形成したかを分析した。学生は紐帯を形成するため、実施母体の予科会、実現手段の『若き血』の成立を目指した。

しかし、予科会自体もまた結束にあたって困難に直面した。なかでも最大の課題は医学部の反対である。予科会委員は、地理と課程において異なる条件を持つ医学部と対話の場を設けることで、参加を実現した。医学部のように他と条件が異なる存在は、全学の合意形成においても懸念点となり得るため、医学部を予科会の一員としたことは全学の結束強化に寄与したといえる。また医学部の反対は、学年横断的な三四会と学部横断的な予科会という概念の衝突でもあった。それぞれの特性や歴史的分析は他稿を期すが、自治団体の形態に着目する重要性が示唆された。

予科会の役割についても、全学校友会の先駆け、学内統一の実行的原動力など複数のあり方が構想された。予科生の山本敏夫は、後に「予科生が全体として総合されたフレンドシップと言う様な、一つの共同的感情と云うものが自然と湧いて来ました。…更に是は予科会だけに止まらないで、予科会の委員をつとめた人が各学部に進み、経済の人は理財学会の委員として働くとうようになり、…予科会の一つの延長として自然に山上のカレッジライフを豊かに致したものと云って良い」と述べた（慶應義塾予科会 1936：17）。結果として予科会は実行的原動力として学内統一に貢献したと言える。

そして『若き血』は、紐帯を形成する具体的手段であった。設立当初の予科会は、結束の象徴を求め、第一に学生歌の作成を目指した。予科生は「予科会の根本目的は…全塾の総合的自治的総合…にあるので…応援歌作成もこの根本目的達成のための手段に他ならぬと確信しています」と述べた（慶應義塾予科会 1927：126）。渡辺（2010）、宮本（2019）は、共に歌うことが感情を共有し共同体意識を形成すると指摘し、『若き血』作成の翌年『丘の上』を作詞した青柳（1928）も、「歌は呼吸である。…それは単に共同一致と云う風の精神以外にも、団体の生活をしている学生にとって、甚だ意義深いいろいろのよき作用を働かせる筈である」と述べた。また『若き血』は他大学との関係の上で成立しており、帰属意識は学内の振起のみならず、外部との線引きの上で形成されることもわかった。一高を事例として文化とスポーツの関係を検討した鈴木（1999）は、「応援という行動で学校全体が対抗競技に熱中することが可能であり、『団結を促し校風を生ずる』ことが可能」と指摘する。『若き血』は対抗試合の側面からも、活気と結束の端緒を与える特有の存在となった。

これらの活動は、教員との協力の上で進められた。予科会設立は、川合との相談の上で進められ、林も設立を祝福した。『若き血』作成も、横山への相談、林、占部への確認、川合や野村への相談など多くの教員との関与が確認出来る。学生活動はこれまで対立構造で捉えられることが多かったが、教員の佐々木（1928：5-6）は「未だ嘗つて塾には学校騒動など一度も起った事のない…学生自身の立派な気風によるものと云わねばなりません」と回想する。表1の通り、慶應義塾でも対立がなかったわけではないが、全国的に学校騒動が頻発していた時期にあつて、教員と学生が連携して課題解決に取り組んだ事例を確認出来た。

学生は紐帯形成という共通の目的の下に、自治団体の結成と学生歌の作成を行った。谷（1927：112）が「確に士気大いに頹廢して居た…その間に予科会の創立。塾歌問題と実に吾々の士気を鼓

舞し、振興せしめ」たと回想するように、予科会と『若き血』は共同体形成に大きな役割を果たした。これまで思想運動によらない自治団体と学生歌は、大学史研究の主題として取り扱われることは少なかった。しかし学生が紐帯を醸成する方策として固有の地位を与えたことから、今後その機能と役割の分析が欠かせない。

以上より、高等教育拡大に直面した学生は、自主的に紐帯形成を志向したことがわかった。学内史料による分析という限界はあるものの、思想運動を中心に描かれがちであった大正末期から昭和初期の学生を巡る議論に、アイデンティティ喪失と人間関係希薄化に対処するために学生が行った活動の一端を明らかにしたことは本稿の成果である。

しかし、本稿で扱えなかった予科会成立以降の変遷と他の学生歌については、検討の必要がある。また慶應義塾予科で紐帯形成の動きが見られた理由も考察の余地があるだろう。江津（2009）によれば、最初に大学昇格した私大予科のうち、慶應義塾では専門学校令下から学科課程上の変更が少なかったが、早稲田大学では大きな変更があったという。慶應義塾では学校側の変更が少なかったために、他大学に比して、大学令に伴う予科設置で生じた諸問題の原因を学生に求める傾向が強かったのかもしれない。これらは今後の研究課題としたい。

## 注

引用文は旧漢字を新漢字、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。また…は中略を表す。

- 1 「或は生気の頹廃と云い、或は気概の失墜」（『三田新聞』163号）と言われ、『三田新聞』161号、慶應義塾予科会（1926）、慶應義塾予科会（1928b）、慶應義塾予科会（1936）などで課題とされた。慶應義塾（1964）でも言及された。
- 2 すべて年度始の値である。「③慶應義塾大学（旧制）学生数 大正9年度～昭和17年度」（慶應義塾 2022：152）
- 3 クラス委員は各組から3名が選出される。予科会成立後はクラス委員が予科会委員も兼務した。（慶應義塾予科会 1928：140）
- 4 「塾歌募集大演説会開かる」『三田新聞』186号、1926年12月7日。
- 5 「塾歌問題遂に」『三田新聞』184号、1926年11月12日。
- 6 与謝野は作詞のみを依頼されたが、自身の一存で東京音楽学校教員の信時潔に作曲を依頼したとされる。
- 7 当時の早慶戦の応援は、早稲田大学が独自に作成した『早稲田大学校歌』を合唱する一方、慶應義塾は『ワシントン頌徳歌』の替え歌である『天は晴れたり』を歌うのみの状況であった（池井 1995：350）。
- 8 応援の際歌いやすいよう一番のみの歌詞とし、最後に「慶應」という文言を複数入れて繰り返し歌えるよう画策した。また歌い出しの歌詞に「…する者」という流行語を取り入れた。予科会学生の意向を受けて、『早稲田大学校歌』の譜を参考に作成したとも言われる。
- 9 坂部（2017）によれば、塾歌作成は1926（大正15）年から1941（昭和16）年の時間を要した。

## 参考文献

- 唐澤富太郎 1955 『学生の歴史』 創文社。
- 伊藤彰浩 1999 『戦間期日本の高等教育』 玉川大学出版部。
- 竹内洋 1999 『学歴貴族の栄光と挫折』 中央公論新社。
- 竹内洋 2003 『教養主義の没落—変わり行くエリート学生文化』 中公新書。
- 筒井清忠 2009 『日本型「教養」の運命：歴史社会学的考察』 岩波書店。
- 天野郁夫 2013 『高等教育の時代（下）—大衆化大学の原像』 中央公論新社。
- 天野郁夫 2017 『帝国大学：近代日本のエリート育成装置』 中央公論新社。
- 井上義和 2001 「文学青年と雄弁青年」『ソシオロジ』45（3）、85-101頁。
- 井上義和 2008 『日本主義と東京大学：昭和期学生思想運動の系譜』 柏書房。
- 井上義和 2019 「雄弁青年と右傾学生：順応と逸脱の逆説から考える」『大学史研究』27号 大学史研究編集委員会 編、205-222頁。
- 永嶺重敏 2007 『東大生はどんな本を読んできたか：本郷・駒場の読書生活130年』 平凡社。
- 江津和也 2003 「大学令による私立大学予科の設立意義とその性格をめぐる一考察—慶応義塾大学、早稲田大学の事例を中心として」『関東教育学会紀要』(30)、39-51頁。
- 江津和也 2009 「専門学校令にもとづく『大学』予科から大学令にもとづく大学予科への改編について—慶応義塾大学及び早稲田大学の事例」『清和大学短期大学部紀要』(38)、53-58頁。
- 山本剛 2018 「大学令下における慶応義塾大学の大学予備教育に関する一考察—大学予科設立認可時の学科課程に着目して—」『近代日本研究』34、243-271頁。
- 鈴木康史 1999 「近代日本における『文化』と『スポーツ』の起源に関する研究」『体育・スポーツ哲学研究』21（1）、9-29頁。
- 渡辺裕 2010 『歌う国民：唱歌、校歌、うたごえ』 中央公論新社。
- 宮本直美 2019 「『共に歌うこと』と集合的感情—A.シュッツの音楽社会学再検討—」『立命館文學』(663)、123-14頁。
- 慶應義塾 1964 『慶應義塾百年史』中巻（後）、慶應義塾。
- 慶應義塾大学応援指導部史制作部会 2008 『慶應義塾大学応援指導部 創部75年記念部史』 慶應義塾大学応援部三田会。
- 慶應義塾史事典編集委員会 2008 『慶應義塾史事典』 慶應義塾大学出版会。
- 慶應義塾 2022 『慶應義塾150年史資料集3 基礎資料編 諸統計資料集成』 慶應義塾150年史資料集編集委員会。
- 慶應義塾予科会 1926 『予科会誌第一号』 慶應義塾予科会。
- 慶應義塾予科会 1927 『予科会誌第三号』 慶應義塾予科会。
- 慶應義塾予科会 1928a 『予科会誌第四号』 慶應義塾予科会。
- 慶應義塾予科会 1928b 『予科会誌第五号』 慶應義塾予科会。
- 慶應義塾予科会 1929 『予科会誌第六号』 慶應義塾予科会。

- 慶應義塾予科会 1936 『予科会誌第十六号』 慶應義塾予科会。
- 林毅陸 1926 「予科会の諸君に望む」 『予科会誌第一号』、3-4頁。
- 神谷隆三 1926 「団体生活根本的精神と我等が予科会の使命」 『予科会誌第一号』、220頁。
- 中村恵 1926 「開会の辞（開会式）」 『予科会誌第一号』、記録 2頁。
- 中村恵 1926 「塾歌運動日記」 『予科会誌第一号』、記録 3頁。
- 神谷隆三 1926 「団体生活根本的精神と我等が予科会の使命」 『予科会誌第一号』、219-220頁。
- 矢部勝昌 1927 「応援歌の出来るまで」 『予科会誌第三号』、100-102頁。
- 谷敬之 1927 「三田小観」 『予科会誌第三号』、112頁。
- 慶應義塾予科会 1928 「一年生諸君に告ぐ」 『予科会誌第四号』、140頁。
- 佐々木邦 1928 「塾の思い出」 慶應義塾予科会 『予科会誌第四号』、5-6頁。
- 青柳瑞穂 1928 「カレッジ・ソング『丘のうへ』に就て」 『予科会誌第五号』、6-7頁。
- 大塚英雄 1928 「予科会の成立とその歴史的意義」 『予科会誌第五号』、12-21頁。
- 矢部勝昌 1929 「予科会の成長とその塾内活動」 『予科会誌第六号』、14頁。
- 纈纈忠行 1936 「『若き血』誕生」 『予科会を語る』 座談会 『予科会誌第十六号』、21頁。
- 三田新聞会 1925年11月10日 『三田新聞』 161号、不二出版。
- 三田新聞会 1925年12月4日 『三田新聞』 163号、不二出版。
- 三田新聞会 1926年1月15日 『三田新聞』 164号、不二出版。
- 三田新聞会 1926年4月27日 『三田新聞』 172号、不二出版。
- 三田新聞会 1927年3月3日 『三田新聞』 190号、不二出版。
- 三田新聞会 1927年10月12日 『三田新聞』 201号、不二出版。
- 三田新聞会 1927年10月16日 『三田新聞』 202号、不二出版。
- 三田新聞会 1927年12月29日 『三田新聞』 205号、不二出版。
- 三田新聞会 1928年5月16日 『三田新聞』 214号、不二出版。
- 三田新聞会 1928年9月3日 『三田新聞』 219号、不二出版。
- 時事新報社 1927年11月8日 『時事新報』 夕刊。
- 坂部由紀子 2017 「信時潔作曲の二つの『慶應義塾塾歌』—二人の作曲依頼者 与謝野寛・小泉信三—」 『近代日本研究』 33、93-130頁。
- 榛名讓 1933 『大学評判記』 日本公論社。
- 小沢愛囀 1958 「塾歌由来記」 『三色旗』 第123号、23-25頁。
- 藤山一郎 1957 「若き血の思い出」 『慶應義塾大学新聞』 早慶戦特集号昭和32年春季増刊、26頁。
- 堀内敬三 1957 「若き血を作ったときのこと」 『慶應義塾大学新聞』 早慶戦特集号昭和32年秋季増刊、12-13頁。
- 慶應義塾大学新聞研究室 1958 「応援歌うら話 慶大の巻 エンギのよい『若き血』『丘の上』は三田の牧歌へ」 『慶應義塾大学新聞』 早慶戦特集号昭和33年春季増刊、48頁。
- 池井優 1995 『陸の王者慶應—体育会名勝負ものがたり』 慶應通信。

# **Developing a Community of Students from the Late Taisho to the Early Showa Period: The formation of “Yokakai” and the creation of the college song “Wakakichi” at Keio University**

Daiki HASESAKA

## **Abstract**

This study aims to clarify the development of a student community during the late Taisho and early Showa periods. It examines the establishment of “Yokakai,” a student organization at Keio University, and the creation of the college song “Wakakichi,” to analyze the aspirations and actions of the students involved.

The three main conclusions are as follows:

- (1) To develop a community, the students aimed to establish “Yokakai” as the executing body and “Wakakichi” as the means of realization.
- (2) The formation of “Yokakai” encountered challenges, particularly the clash between the concepts of the cross-grade “Sanshikai” and the cross-faculty “Yokakai.”
- (3) Community formation took place in cooperation with faculty members.

During the late Taisho and early Showa periods, higher education in Japan expanded significantly. The number of students at Keio University tripled, leading to concerns about the weakening of interpersonal relationships. However, the students voluntarily sought to develop a community and navigate through this crisis.

